

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和4年10月14日(金)

みんなの居場所

雑感

自分が他人からどう見られているのか？若い頃気にならなかつた。自分が自信が持てず卑屈な性格だったこともあり、常に周囲からの目を気にしていた。自信が持てるようになるには経験と学びによる自己変革が必要。それをしてこなかったという後悔が、変革の原動力になっている。また、自分を厳しく見つめる目を持つようになる。たごは、大きな成長だと目負している。これに早く気が付いていればもっと優れた教師になれたの……。

携帯・スマホが普通に使える時代を憂う

ある女性の書簡を紹介いたします。携帯電話のある今の時代はこのよくなかなさは感じられないかと、改めて思います。

「熊本の友人から手紙が届き、本紙の紙面が同封されていた。聞いた途端、私は息をのんだ。「旧陸軍菊池花房飛行場」の見出しがあった。思い起こせば、もう七〇年近くも前の事。女学校在学中、バレーボール部だった私は、熊本市からたびたび菊池まで遠征した。その練習風景を、いつもたずんでじっと見ている凛々しい士官候補生がいた。先輩の知人かなと思いつつ、いつしか私は彼を意識するようになった。

当時は、男性と目を合わせることも許されぬ時代。もちろん、お互いに名乗りあうことはできなかった。菊池電車の中でドキドキしながら、遠征の日、遠く姿を見ることが出来るうれしさが待ち遠しかった。

桜の花の散るある日を最後に彼の姿は見えなくなった。特攻機にのって出撃したのだろうか。私はしきりに気になった。それからしばらく経ったある日、学校から帰宅すると、玄関に慌てて出てきた弟が「今、お姉さんに会いに飛行隊の士官さんが訪ねてきたよ。」今思っても、無我夢中で駅までどうやって走ったか……。ホームに立った時、電車は静かに発車した。車窓の中を目で追いながら彼を探した。直立不動で敬礼している彼がいた。私の初恋は終わった。

どうして、私の家があったのか、七〇年近くの間、なぜともにも忘れられない思い出である。紙面の訓練生の集合写真の中に彼の顔を、大きな天眼鏡で何度も何度も探した。涙が止まらない。名前も分からぬ人の生死を調べることもできない。七〇年近く、密かに心に温めてきた人、そして、この新聞も心とともにも大切に読んでおこう。」

今はスマホが当たり前のようになり、異性に「キドキ」しながら電話をかけていた時代は遠い昔です。私も昔書簡時代を懐かしく思い出しながら、今は「切なみ」を感じられない時代だと思いついた。また、SNS全盛の昨今、子供達の「コミュニケーション」の稚拙さ、また、誤った使用で、取り返しのつかないことが起きています。何をやるにもSNSありきで、対面にある知的な会話はあまり見かけません。私達の世代は、異性性「電話を掛けたら必ず丁寧な言葉づかいで何度もリハーサルしたのですが……」

シリーズ「自分を語る」#40

硬性「ルセットが読者のため」も、退院の話が出るようになっていました。この時点でもう1月の終わりでした。もう2ヶ月と半月入院していたこととなります。退院は3月の初め頃に決まりました。それまでの間、少しでも外での生活「慣れるため」、外出許可を取るようになっていました。と言っても、午前半日とか午後半日とか短い時間です。でも、この外出は楽しかったですね。病院ではアルコールは禁止ですが、当然我慢するしかありません。でも、外出した時だけは、うっかり飲みました。季節は冬ですが、それでも私はビールが飲みたくて、でも一人で居酒屋やレストランに行くような度胸は無く、結局、體面アパートの地下でビールとスルメを買って、屋上の「フレイム」に今はありません。このパンチに腰かけて飲みました。空気が冷たいのですが、確実に復帰が近づいているという、安心感に似た感覚を感じる時間でした。

楽しい時間を過ごした後、当院銀座通りであった紀伊国屋書店を経由して、病院に帰るといつの間にか、定着しました。少し長い距離を歩くと、体力も徐々に回復していききました。いよいよ3月、退院を迎えます。

退院当日は、看護師と定着した見送りがありました。後になって思いますが、結構機能的な定着だったようです。だから見送りが多かったのではないかと推測しています。私は3月入院してからの、多くの患者さんが退院されるのを見送りました。一つの傾向として、病院の方針に従って、生活ルールを守る人、けがや病気を治す「ユニ」に懸命な人、お医者さんや看護士さんにも理学療法士の先生も、優しかったように思うのです。結果的に見送りのも多くなるのでは……。その時の忙しさにもよるのでしょうが、私は大々的の見送られ「お世話になりました。頑張ります！」という気持ちで退院しました。

退院後は月に2回のリハビリと1回の診察を受けながら、出来るだけ規則正しい生活を送るようになっていました。仕事への復帰は、学校には申し訳なかったのですが、我がままを言ってしまうところになりましたので、復帰までの時間は仕事に必要最低知識を蓄えたり、友達の家に泊り旅行したり、普段ではできない事をさせて頂戴しました。

職場復帰まで約半年、何をしようかと初めは迷いました。退院してから2か月ほどは車の運転も控えるように言われていたので、真面目に主治医の言いつけを守り、「リハビリ」に専念していました。それまでは自宅周辺の散歩や、人の少ない時間帯に電車で藤崎宮まで行き、上通下通を歩くことが楽しみになっていました。また、就職してから本格的に開始した書道については、有る余る時間の中でかなりの時間を費やしました。この時期、書道「顔」して印象染染「顔」して、中国の「四書五経」のうち「論語」「大学」「中庸」「孟子」「易経」の「四書」について、半紙に小筆で文字を書き写しました。確か、半紙1000枚ほどだったと思います。更だ、その後は書経にも挑戦しました。初めは「般若心経」でした。意味が書えず、ただ書道の訓練として書き写すのみでした。その他にもお経を書いています。覚えているのは「般若心経」だけでした。当時は腰をかかっていたので、いわゆる柔幅は断る書きませんでした。小筆の練習になったと懐かしく思い出します。(つづ)